

ブレディックミッションの悲劇と奇跡

ウイルスは生きている その1（同書14頁～27頁）



安部
光壹
Kouichi Abe

① 1950年、アイオワ州立大学で免疫学を学んでいたストックホルム生まれのヨハンフルティンは、1918年、世界で猛威を振るったインフルエンザウイルスを同定しそれに対するワクチンを作るという壮大なテーマに取り組んだ。

② 彼のアイデアは、スペイン風邪で亡くなった人の亡骸からウイルスを分離して、それを利用してワクチンを作成すると言うものであった。

③ 彼は、1918年当時のあるニュースに着目した。それは、アラスカのイヌイットが暮らすブレビックミッションと言う地域に突然舞い込んだある悲劇だった。

④ 1918年11月、郵便とともに運ばれた、そのモンスターは、そこに住む150人ほどの住民のうち、72人の命を命を僅か5日間で奪い去ったというニュースだった。報道は、その永久凍土の上に、白い十字架が建てられ、その地下には、今も、犠牲となった人たちが、眠っているということだった。

⑤ 彼は、このニュースを調べ、このアラスカの永久凍土に埋葬されている犠牲者こそ、永久凍土が天然の冷蔵庫となり、ウイルスを保存しているかも知れないと考えた。

⑥ 1951年、アイオワ州立大学の研究チームの一員として彼は、ブレビックミッションを訪れた。村の議会を通し



て村人達の了解を得て、彼は、1918 年のパンデミックでの亡くなつた犠牲者の墓を掘り起こし、遺体から良好なサンプルを採取することに成功した。

⑦ しかし残念なことに、いくら探してもそこには感染症を持った生きたウィルスは見つからなかつた。1951 年当時の技術では、感染症のあるウィルスが得られなければ、それ以上、研究を進展させることは難しく、彼の博士論文研究もそこで頓挫した。
そして失意の中彼は研究を離れ、その後医師として暮らしていった。

⑧ それから 46 年後の 1997 年、勤めていたサンフランシスコの病院を既に退職していたフルテンは、「サイエンス」誌に掲載された米国陸軍病理学研究所のジェフリー・トーベン・バーガーの論文を目にした。

⑨ トーベン・バーガーはわずかな材料から遺伝子を増幅させる PCR 法と言う技術を用いてスペイン風の原因となったインフルエンザウィルスの遺伝子解析を行っていた。
しかし彼らは樹脂包埋されたサンプルを用いたため、ウィルスの保存状態が悪くサンプル量も少量で断片的な遺伝子情報しか得られていなかつた。その論文を読んだフルティンは、46 年前の自分の経験が役にたつのではないかと思い、すぐにトーベン・バーガーに手紙を書いた。

⑩ そこには過去に失敗した課題にもう一度挑戦したいこと、採取は自費でやるつもりであること、検体が採取できたら米国病理学研究所に寄贈することが述べられていた。

⑪ フルティンは、トーベン・バーガーの協力を得て再び 2 度目のブレディックミッションを訪問した。

⑫ 1997 年 8 月のことである。1950 年当時 26 歳だったフルテンはすでに 72 歳になつて いた。46 年前と同じように村議会の許可を得た後、村人たちの力を借りて採掘作業を開始した。四日間の採掘作業の後彼はついに状態の良い 30 歳前後のルーシーと名付けられた女性の遺体を発見した。その肺から得られた検体を、複数の日に分けて UPS とフェディックスと郵便とでトーベン・バーガーに送つた。これは輸送中の事故などで、万が一にもサンプルが失われないようにするためだつた。

⑬ その後ルーティンは遺体や墓を元通りに戻し世話になつたブリックミッションの人々に謝礼を払い、新しい 2 つの十字架を作つてその共同墓地に立てた。



⑯ トーベンバーガーの下に届けられたルーシーの肺組織検体の状態は素晴らしく約3週間後、その検体から1918年のインフルエンザウィルスに由来する遺伝子情報が得られたことがフルティンに電話で伝えられた。そしてトーベンバーガーらは、その後1918年のパンデミックを引き起こしたインフルエンザウィルスの持っていた遺伝子情報の全容解明していくことになる。

この本は、ウイルスに関する不思議発見の本です。お面白いし、勇気付けられます。ウイルスは、敵か味方か？だったら、Youは、一体何者なの？と言う不思議が広がります。結局、この問題は、人間とは何かについて、考えさせられます。決して、哲学的、文学的側面からだけではなく、医学的、疫学的側面から。